

現実社会での闘争

—私のユーウツ—

昭和元禄というまことに安易なムードが支配するなかで、私のグチを聞いてもらいたい。

今世界各地にロービングしているスチューデント・パワーの台頭、これを生み出した背景には、いずれにせよ天下泰平ムードがあるが、それ故にこそ、何かせずにはいられないもどかしさを、じれったさを、これと同根の退廃的世相が、これら学生たちを舞台の前面に押し出してきたとも云える。

今年になってからの彼等の動きは、五月世界中の耳目を集めたゼネストを演出したパリの大学生たち、オリンピックを巧みに利用したメキシコの学生たち、更に内にあつては、東大、日大紛争や、三派全学連の無軌道とも云える暴動等々……。これら派手な学生たちの動きの蔭にあつて、本来ゼネストを伝家の宝刀として行使し得る労働者の存在が、かすんできたのはまったくのところ事実である。私自身にとつても実のところ元気の良い学生諸君の行動を馬鹿馬鹿しいと思いつつも、その生きの良さをうらやましく感じる。だからといって、彼等の行動を全面的に是認出来ないが……。

ざっと私自身周囲を見回してみたところ、確かに昭和元禄ムードは静かに、しかしねつちりと入り込んできている。典型的な例としてそれはレジャーブームという形で侵入してきた。

このレジャーブームという言葉それ自体は、さしたる意味をもたないのだが、極めて今日的にアレンジされ、スポーツにレクリエーションをうまくミックスした余暇の過ごし方の現代的モデルの如き幻想を与える。実はと云えば、閑をもてあましたホワイトカラー族が主体的に行動を起こすのではなく、与件さえ整えば、これに参加という形で行動するという極めてパッシブなモデルなのである。ことわつたように、これはあくまで一例なのだが、この受動的な空気が現今の昭和元禄ムードの底辺で独占のアグラをかいていることは疑いない。

この点を認識した上で、さて自分自身を振り返ってみると、現在私たち組合員が抱えている問題には、春闘の賃上げと物価値上げ反対闘争があり、加うるに政治闘争として、当面ベトナム和平、沖縄返還が最大のアップールである。

ここで率直に話を進めるなら、今私を含めたホワイトカラーも組合員であるとの前提を踏まえた上で、このホワイトカラー族が、これらのスローガンに向かつて一致団結、直進すれば話は簡単だが、一筋縄にいかないのが現実である。致命的なのは、ホワイトカラー族に押しなべて組合員意識が希薄なことだろう。そして前述のレジャーブームがこれに拍車をかける。

賃上げ闘争にしても、会社側と組合側の交渉によって決まるが、組合側といったところで、三選四選されたような固定化した執行部が、前年の実績に諸般の情勢を勘案した希望的数字を加味して、これを組合員総員の一步もあとへ引けぬ最低額として要求し、いずれは大

幅に後退したところで、なし崩し的に妥結をみるのだ。元来、意識の薄い組合員がいずればこのカラクリに気がつくだろうが、時すでに、彼はマイホーム主義の権化となり、レジャーブームにも足を踏み込んでおり、物理的にも彼自身、組合運動に割くべき時間を完全に失くしていると云つても良い。そして一旦このレジャーブームに染まる、もはやフィードバックはきかない。

仲間内の恥をさらすようだが、ホワイトカラー族の政治的意識の低さはもう論外である。二つのアッピール、①ベトナム和平にしる、②沖縄返還問題にしる、ほとんど誰一人として、これらの問題を正確に捉えていない。確かに前者について和平を望む声はあつても、なおそれは、北爆は申すに及ばず、米軍駐留こそがこの戦争を持続させ、ベトナム民衆に悲惨な生活を強いている原因なのだというベトナム戦争の本質論を完全に見落としている。それ故、ベトナム民衆をこの悲惨な状態から解放する為に、基本線としてまず米軍の撤退を求め論理、これこそがベトナム和平に結びつくという発想はなく、漠然と平和か、戦乱かと、一方的に二者択一の立場に立って平和を選択する。だから、早めに平和が達成出来るならそれこそ我が望むところとばかり単純に戦争反対を叫ぶ。だから、同じようにこの本質に気がつかないシンパからはカッサイをうける。だが、こういう論理こそ擬似平和主義者につけこまれる危険がある。

後者の沖縄問題にしてもしかり、こうした問題に対する意識の低さはもはや慢性的なものといえる。

「このように一部に熱心な組合員がいたとしても、私たちホワイトカ

ラー族の組合員意識というのは、ざっとこんなものだ。それだからこそ、こういう組合員をどうまとめ、引っ張っていくかということにオランダは頭を痛める。

今日(十一月十七日)私は第四回物価メーデー中央集會に参加して、その後都内をデモした。総評は約六万人の参加といったが、参加したのは外からみてかなり積極的に組合運動に取り組んでいると見られる人たちが、しびしび出てきた組合員が相当数いたことを認めないわけにはいかない。

今ひとつの運動を推し進めていくにあたって、私たちが最も問題にしなければならぬのは、その運動の分極化・多様化についてである。つまるところ、運動が強力に推進されるとともに、問題は多様になり、複雑になる。ひとつの運動の中で多様化が他の要素もからんで分極化の道を辿る。今日組合運動に限らず、世の大きな運動のいくつかには、分極化のきざしがみられる。私たち労働組合運動を進めていくものにとつて、心しなければならぬのは、前記したようないくつかの客観的な情勢を併せ、主体的条件に考慮を払いつつ、闘争を進めていく過程で組合運動から目をそらさせない努力を惜しんではならないと同時に、分極化させないような闘争形態を考えていかなければならない。諸々の情勢を考えると中々思い通りにいきそうもないが、しかし、そうでなければ組合運動は細胞分裂を起してしまふだろう。このあたりが難しい。